は、極めてリアールなもので、その點は、秋聲のものと甲乙はない。しかし、描寫の幅が些か違ふ志賀の方が、狹く深くとられ、時にコンデンスされた感さへ伴ふ。

ドストイエフスキの性格描寫を、「人の心を坩堝に容れて煮詰めたものだ」と評したものがあつたが、まことに「虐げられた人々」のネルリや、「罪と罰」のラスコルニコフの性格を思ひ見ると、自然のまゝでは迚も諒解出來さうもない個處々々を、一皮剝いで見せつけてくれてゐるやうな點がある。しかし、これ迄葉や莖のため障られてよく見えなかつた幹を、手に摘んで見せてくれただけのもので、リアールの點に、兩者變りは無い。志賀の作品には、ソニヤやドミトリなごは飛び出して來ず、われ〳〵日常周圍に見る如き人々のみが描かれてゐるだけであるが、行き方はドストイエフスキに近い。かれの心眼は、澄み切つて事物の底を見徹す力を持つてゐる。イエフスキのものと同じやうに、殆んど叙景とか環境の描寫に意を用ひず、ひたすら、人間の魂を明鏡に映しとつたまゝ、これを、寸分の假借なく、着實に描き出す。ぽつり〳〵短かく切れた書き振は、極めて着實で、些のゆるぎもなく、鋭い短劍の匂がある。氣合の點には、かの元祿の大家西鶴をさへ忍ばしてくれる。

宇都宮の友に「日光の歸途には是非御邪魔する」と云つてやつたら「誘つて吳れ、僕も行くから」と云ふ返事を受取つた(「網走まで」)

といふ樣な書き出しで、内容が得心のゆくまで把握されなければ、一筆をも下さないといふ樣な健實さと、書き始めたら一語の冗をもすまいといふ眞面目さとが見える。人物が、作者より一歩でも先行するといふことを許さない、件者は、人物を人込みの中に失はないやうに、最初からちやんと用意して掛つてゐる。さうして、あるがために漫然と描かれるのでなく、味識する價値あるためにそれが表はされてゐる。

一時、志賀ばりとまで言はれて、文壇にかゝる志賀の筆致を模倣するものが輩出した。しかし今は殆んど失敗してその影を沒してゐる。

最初の兒が死んだので、私達には妙に臆病が浸込んだ。健全に育つのが當然で、死ぬのは例外だといふ前からの考へは變らないが、一寸病氣をされても私は直ぐ死にはしまいかといふ不安に襲はれた。それで醫學の力は知れたものだと云ひ〳〵矢張り直ぐ醫者を手頼りにした。自分でも恥かしい氣のする事があつた。田舍だから四圍の生活とのつり合ひ上でも子供を餘りに大事にするのは眼立つてよくなかつた。(「流行感冒と石」)

かうした平話的叙事も、結極、現實に滲透することの深み、體驗の鋭さから、拔け出てゐるのである。それで、追隨者には、一寸始めの間は眞似が出來ても、その先きが續きかねる。何となく身上咄か、日記の斷片を聞かしてくれてゐるやうであり乍ら、讀者はいつか作者のしんねりした重々しい言葉にひきこまれてゆく、自分は、やはりその氣持を、俳句の俗談平話の中に求めようと思ふのである。子規が、ある人から俳句の作法を尋ねられ時、「自然にあることをたやすく述べればよい。今日の樣に寒い日には、座る時も一寸衣服の膝を揃へて座るから、『座る時膝を揃へる寒さ哉』とよめば、すぐ句になる――」とか敎へたといふことを耳にしたが、實は、その平話が中々容易な業で無いのである。表現こそ平話的であれ、その表現までにわれ〳〵は俳句的鑑照といふ難關を通過しなければいけないのだ。總じて、今日の文章は、平話的である、俗談的である、しかも、その味識の困難な點は、紅葉、露伴物以上としなければなるまい。

四

芥川の作品と言つても、「羅生門」時代のものと今のものとを、必ずしも同等に取扱ふべきでないかも知れない。しかし、自分は、芥川の藝術の特色を、何處までも「羅生門」並びにその展開の上に置きたいと思つてる。かれの藝術は、前述もしたやうに、大體還相廻向にあるもので、出來上つたもの、悟り切つたもの、回顧的のもの――とまづさういふ風に見るべきものであらう。

これについて自分は芥川の前に、鷗外と漱石といふ二文豪の存在を聯想する。自分は、中學校の時から、鷗外の「美奈和集」(中に、舞姫、うたかたの記、文づかひ等がある)と、漱石の「漾虛集」(倫敦塔、カーライルの博物館、琴の空音等がある)とを、ひごく愛讀したものだ。前者は、まだ明治二十年代に鷗外が、ドイツのロマンチシズムの影響をうけて物した作であるが、當時の硯友社一派の戀愛小說に比較すると、いかにも貴族的であり、詩的であり、優雅味があり、古典的であつた。後者、漱石のものは、遙におそく明治卅八九年の作であるが、貴族的古典的ロマンチシズムの點に、前者と共通する所が多い。主情味のやうで、つねに、その外輪をひつくゝつてゐる一つの型があつた。超現實的、夢幻的、歷史的の香味が何處かに仄かな流を作つてゐた。それは、鑑賞家、好事家、學者の物する藝術の世界で、そこには生活と藝術の間に溝渠のあることを否定出來ない。芥川自身の品格が、すでにごことなくかうした學者らしい所があるやうに、かれの作品こも鷗外漱石

的のエレメントが多い。しかし、かれには、美奈和集や漾虛集が無い。あれほどのロマンチシヂムが無い、自然主義前の主情主義が無い。これは、芥川自身の天賦であるより、むしろ時世の相違、環境の影響に基いたものと見るべきではあるまいか。

かくで明治四十代、自然主義全盛の時代に、鷗外は「涓滴」中の諸作を公にし、漱石は「猫」「野分」「虞美人草」以下の諸作を發表した。しかも言ひ合はした樣に、兩人の作が反自然主義的のもので、遊樂の藝術、俳味の藝術、低徊趣味の藝術であつたことは面白い。それは、暗中模索の藝術であつたり、自然模寫の藝術であつたり、禮讃憧憬の藝術であつたりしない。すでに、人生の辛甘を嘗めつくし、宇宙を大觀し、悟脫の境地に入つて出て來た人の藝術であつた。「涓滴」や「坑夫」「夢一夜」「思ひ出すこと」などの持つ特殊の人生鑑照の態度――それは充分、その後繼者と見るべき新思潮同人の出現を豫言してゐる。

> 溫泉宿から鼓が瀧へ登つて行く途中に、淸冽な泉が湧き出てゐる。水は井桁の上に凸面をなして、盛り上げたやうになつて、餘つたのは四方へ流れ落ちるのである。
>
> 青い美しい苔が井桁の外を掩うてゐる。夏の朝である。(「杯」)

これは、涓滴の中にある一節であるが、泰然と上座に構へた人のおちつき、融通無礙の遊樂味はこの行間にも感ぜられるではないか。「曹請中」「電車の窓」「追灘」など次々によんでゆくと、炎日に淸涼劑を飲まされるやうな、おのづからな微笑が洩らされてくる。

テーマの捉へ方の妙趣――それも、すでに十分見ることが出來る。洗煉された才氣、風格ある着眼――それは、壯年文學において始めて求めうるものであり、テエストの深い文學に始めて見られるものである。鷗外のもので言へば、「お花」や「大發見」はその適例であらう。漱石の作は、晩年の自然味現實味の深くなつたものにさへ、テーマの骨子をなしてゐることは、かれ自身言つてゐるとほりである。

五

芥川は、早熟のディレッタントである。かれには何だか、若くて壯年者の仲間入をし、冬の日を編してゐるかの芭蕉の弟子杜國を思はしめる風格がある。朝鮮のほそり芒の匂無き――なごゝ杜國の木枯の卷の表に詠んでゐるのが、いかにもこましやくれて見える。兎も角、若くして直指人心的

に俳味を味識した者の品格が、芥川に自身にもある。かれは、漱石の樣に、俳句をひねり、鷗外のやうに身邊の物語を、極く易々と手際よくすゝめてゆく。

「夜來の花」は、昨年輯刊されたもので、芥川のものとしてはまづ新しいものが入つてゐる。卷頭の短篇「秋」は、羅生門風の歴史物、テーマ小説を脱して、作風の轉換を豫想さしたものであるが、それらに屬する二三の作は、結極、かれのもがきであり、好奇的試作であつたことが分る。かれの稟賦は、イブセン的でもなければトルストイ的でもない。況してバルザックでもなければフローベルでもない。ガリバーの旅行記を愛讀するかれである。怖らく「夢想兵衛胡蝶物語」や「浮世風呂」なども面白くよめたかれであらう。かれには、人生がせつぱつまつたものでない。結極ユーモラウスの人生である。

かれは、高座から人々を見おろして、微苦笑を以て悠々と物語る。「夜來の花」は、芥川の頭で作られた（意識的統一をうけた）氣の利いた物語集である。「御退屈でなければ、御話しますが――」（「黒衣聖母」）といふ樣な言葉から、筋は本題に移り、「或春の日の暮です」（「杜子春」）といふ樣な筆から、文がおこされてある。多く、最後はおちになつてゐる。「捨兒」でも、「舞踏會」でも、「鼠小僧次郎吉」

でも結びに來ておちがある。ふんさうだつたのか――と、讀者はそこに來て、羅におとされたやうな空虛な心、しかし、ほつと息づくやうな滿足さとを味はゝされる。それはぴりつとした山椒の味である。微苦笑される味である。わが傳統藝術の持つ味である。鷗外の「涓滴」は、芥川物に較べると、ちつぴり鷗外自身が顏を擡げかけてゐる。志賀物は、日記でも書いてゐるやうに、私がより多く出切つてゐる。しかし、山椒の味のある點に、三者互に彷彿たるものがあるやうである。秋聲も、「ファイヤ・ガン」といふやうなテーマ物を描いてゐる。その着眼行筆は、いかにも芥川物を思はしてくれるだけ、所謂秋聲物と遠い樣であるけれど、必ずしもさうでない。

自分はこゝに、知的遊樂といふ言葉を使つて見よう。遊樂といふことは、これまで三四度使つて來た言葉であるが、實は、自分の好いてゐる言葉では無い。鷗外があそびといふ言葉を用ひ（「あそび」）漱石の非人情といふ言葉を用ひたのも（「草枕」）半ば時代の思潮に對し諷刺的にアイロニカルに用ひたものと思ふ。遊樂と言へば、自分を忘れた放恣で、盲目な所業のやうにとれるが、早く世阿彌や芭蕉の自己を説明してゐる言葉であるやうに、それは睿智的遊樂である。理念的清遊である。それは、この頃よく使はれる意味に、人間的、生活的でないかもしれないが、決して、根も葉もない

氣紛れや、馬鹿笑ひでないことは斷言してよい。むしろ、餘りにリアールなのである。この點に、秋聲の「未解決のまゝに」と「初冬の氣分」と「ファイヤ・ガン」の三つは、底流を同じうする。まして、「十一月三日午後の事」「清兵衛と瓢箪」それから「手巾」「或日の大石内藏之助」の持つ呼吸との共鳴は期待されよう。自然の網を滑り出た潤達無懈の境地で、身邊の些事を物語り乍ら、作者自身をモデルにとりながら、主客の混濁も來なければ、鑑照の不純も生じない。

しかし、自分は、芥川宗を稱へるものでもなく、志賀禮讃を持ち出さうとするものでもない。花袋の「殘雪」をおもひ、小劍の近業をおもひ、コントの流行する現情をおもひ、隨筆的鑑照の多い現代をおもふ時、それが假令志賀ばりや芥川物に遠くとも、縹渺とした傳統味を感じた自分の經驗を、たゞ話したまでである。それも、多くの泰西の諸作に親しまない寡聞の自分にとつて、傳統味など感ずることが、既に迷誤であるのかもしれない。誰だつて、文壇に慣れてくれば、筆に寂びが添つて來ようし、年をとれば佗びた心境にもなる、これはわが國の文筆家だけのものではない――さう頭から評されると、今更辯駁する途も知らない自分であるから。

近來、「今日の文學」の作品が、著しく中等學校や高等學校の教科書の中に這入つて來た。さうして、それらを見渡して見るのに、藤村、志賀、芥川などの文が、一般に多いやうである。しかも、初等教育程度のものに、かなり諒解に無理な材料を屢々見かける。なるほど、難句や熟語はその間に少ないかもしれぬが、それを充分味識するまでには、かなりの教養を必要とする。見かけは、あつさり手輕に書かれたやうで、見えざる作者の苦心の跡が底に潜んでゐる。それは、書きつばなしの癖の多い中學程度のものには、一寸會得されにくいものだと思ふ。

自分たちの中學時代で幅をきかしてゐた教科書的文章は、第一、德富蘆花のものだつた。蘆花崇拜の先生などがゐて、孝りにその文章の妙を讃へたが、「鴉聲と蛙聲と交々晴雨を爭ふ……」など、いふ文趣は、すぐ鑑照體得し得たやうに思ふ。(その當時の考へ方と、今の見方にさまでの相違を見出だし得ない。)第二に、樗牛、桂月等の時文であつた。樗牛の文には、大分、念入りの熟語や隱引法があつたけれど、言ふ所はしかく深くなく、大抵會得し得てゐた積りでゐる。「我が袖の記」など、好んで諳誦したものだつた。

しかし、獨歩花袋の時代を經た今日の文章は、裝飾のないだけ、中核に入りにくい。味到しがたい。どうしても、教授する方の立場からすれば、教授者の鋭い鑑識力が必要となつてくる。正しい

批評眼を養ふ第一の方法は、今の場合、多讀から入いる歸納的方法と、本質、特色、中味を摑んで出てくる演繹的態度との二つしかない。かつ「清兵衛と瓢箪」や「或日の大石内藏之助」の出てゐる教科書もあるやうだが、これらの文章を玩味さすには、いよ〳〵わが傳統藝術に對する、根本的理解を必要とする事になる。無技巧の技巧は、一度、技巧の世界を乘りこして出なければ感得されがたい。無技巧の技巧といふのは、澁みといふ言葉で代用されてゐる内容である。澁みといふものは、一寸目に單純で素樸のやうでありながら、これは原始民族や、青少年のもつ素純さと、一めぐりだけの違ひ目がある。教授者は、そのみがきの掛つてゐないやうで、實は存分掛つてゐる點を指的し指導してやらなければいけない。

六

最後に、話を一寸ばかり、わがシウド・ナチユラリズム、シウド・ロマンチシズムに引返して、附言しておきたい。いや、シウドと言へば誤解が生じよう。つまり、日本的自然主義、日本的浪漫主義についてである。

實は、かくいふ自分も、あまりに個人的であり（非集團的）、あまりに隱遁的であり（非社會的）、あまりに觀念的であり（非情熱的）、あまりに超越的である點について、傳統文學を彈劾したいと思ふ。自分は、傳統文學の中に、洗煉琢磨された孤島文學成人文學を見得るけれど、まだそれが、東海の優美な自然と、温和な天候に惠まれた民族に、甘い酒とチヤーミングな幻影とを齎すかとも考へ得られるけれど、ついに、當來の文學でないことを考へざるを得ない。清兵衛の瓢箪に對する執念も立派な題材とならうし、作中の人物に小便をさすことの多い芥川の着想も、これをユニークすることが出來よう。しかし、それが特殊的に、形式的に、趣味的に傾むきがちであること、全人味、開放味、民衆的精神を缺きがちであることをも否定出來ない。

自分は、傳統藝術のもつかゝる短所を補ふものとして、もつと、叙事的な民族的な普遍的な、莊重雄大で明快高調の文學を翹望する。まして、教科書にもわれ〳〵の感覺を通じて描かれたロマンスの採擇される日を切望してやまない。現行の教科書の文章が、漸次、内省自照の精神に富むもの、多くなつたことを喜ぶと共に、自分は、いよ〳〵その中に叙事詩的ロマンス的の内容の貧弱であることを痛嘆するものである。神曲やゼラブルの如き作品の求められないことを遺憾とするもので

ある。

しかし、新しいものを生むものは、十全に自分を知るものでなければならぬ。今日の文學を反省するところより、正しい伸長が將來される。最後に、今日の文學のもつ精神を考へ、併せて將來の文學についての希望をのべた所以である。

齋藤清衛氏著書

國文學の本質　壹册（明治書院發行）　大正十三年七月
總論、各論――A靜かなる情趣　B仄かなる理性　C非寫實傾向　D人間より自然へ　E自然的より忘我的へ　F形と文學道、結論

國文學の序說　壹册（古今書院發行）　大正十四年四月
四大國文學者の批判――紫式部、西行、兼好、芭蕉

國文學の傾向　終

不許複製

（定價金貳圓四拾錢）

發行所　不老閣書房
東京市外大久保百人町九〇
振替東京二七〇二一

大正十五年五月三日印刷
大正十五年五月五日發行

著者　齋藤清衛

發行者　東京市外大久保百人町九〇　中西貞

印刷者　東京市小石川區戸崎町十三　多木壽一

印刷所　東京市小石川區戸崎町十三　多木印刷所

大取次　東京六合館・淺見文林堂　大阪　柳原書店

東京高等師範學校教授

垣内松三著

壹版 貳拾

國語の力

國語研究及國文教育の大膽なる破壞にして、細心なる建設なる本書は眞の國語研究者、生命ある國語教育者の寶典なり。

定價貳圓
送料八錢

近刊

國語教授の批判と內省

著者の苦辛努力の著、國語の力の姉妹篇なり。國語の力の讀者更に本書を讀まば其の深奥を窺知するに難からず。

定價貳圓五拾錢
送料八錢

東京壹 振替東京貳七〇 行發房書閣老不 東京百人町九〇 淀橋局

垣内松三・土方義道共著

四版

國語讀本 文意の研究

名著「國語の力」に說かれたる學理に基き、文學概論の立場から國語讀本の全卷を研究し、實際運用の適否を確め、更に垣内教授の嚴密なる補訂を經て、玆に理論と實際との完全なる一致を見出した研究の成果が即ち本書である。

本書は文意研究に主眼を置き、更に節意・句意・語意に及ぼし、卷一より卷十二まで各課をもらさず加ふるに目下の異說を網羅し、批判した研究である。故に本書は直に細目となり、教授案の根據となるのである。

四六判上製三六〇頁
定價二圓五十錢
書留送料十八錢

垣内松三校閲 谷岡義賢著

好評四版

創作の力（1）純眞篇

本書は現代の新しき文章の必然の方向を示し、その出發點と目的を明にして、「書く力」を伸すと共に「讀む力」の根柢を養ひ、批判的精神を目覺して、藝術の正しき理解にまで深めてゐる。故に本書を讀めば文章上のあらゆる問題を解決して、自ら「書かう」と云ふ心になり「書くこと」が出來るやうになるのみならず、國語の力がつき心が養はれ、正しく繪や文學のことまでも解るやうになる。

四六判三八〇頁
挿繪二數十圓
定價二圓
送料八錢

東京百人町九二 外大久保 市 不老閣書房 振替東京一〇七二

法政大學
文學部教授　小山龍之輔著

再版

新時代の文藝と和歌俳句の藝術味

四六版上製四〇餘頁
定價二圓八十錢
送料　十二錢

内容

前篇新時代の文藝
1 論に先だちて
2 余のからだ全體主義の藝術
3 新感覺派の主張とその作品
4 日本藝術の故郷記紀の歌
5 記紀の歌と新時代の藝術
6 歐州の新藝術と新時代の文藝
7 感覺のオーケストラ……人形芝居と能樂

後篇和歌俳句の藝術味
1 和歌俳句の本質
2 和歌俳句の歌律

著者十餘年の蘊蓄を傾倒して欝教たる詩心を述ぶ。新進作家を俎上に載せ、縱横に評隲して完虜なからしむ、文藝を說くも概論を先きにせず、直に具体を把んで佳否を判別し、而して當然の歸結を敎ゆ。古今東西大家の諸說を羅列し、乾燥せる概念を述ぶるのみにして一句の鑑賞だにも具体的に敎ゆること能はざる從來の著書と全々其の類を異にす。言々、句々、著者の肺腑と東西諸大家の肉腸とを打つて一丸としたる點血塊肉は是れ本書なり。

鈴木等三郎著　然草

四六版上製四〇八頁
定價二圓五十錢
送料十五錢

四版

章意・節意
句意・語意
嚴密
對照
徒

本書は題目の示めすが如く、章意・節意・句意・語意が本文と嚴密に對照し一見、見通し得る樣科學的に組織してあるから、最少の時間で最少の努力で明確に理解が出來、國語の力が十分養はれる。

著者が在來の註解、詳解的の型を破つて本書を著はすに至つた數ヶ年の苦辛と努力は正に讀者の學習努力を最少限度に低限し、其の効果を十二分にすることは疑ひない。

此の目的を達する爲めに

一　句毎に對譯して、それがそのまゝ簡明な解釋となるやうにした。感動詞、助動詞、助詞、省略の語句等出來るだけゆるがせにせぬやうにした。

二　下欄の中の重要語句は、特にゴジック活字を用ゐて他と區別した。

三　細しい說明引用語句等は、段末の參考欄に集めた。

四　上下の欄の數字は、節の對照に、〔　〕は、補充語句を示すに用ゐた。

五　目次には、「出」「中」「女」「專」など區別して、各讀者諸君の選擇に便じた。

六　卷末には、語句の索引を附した。

鈴木等三郎著　最新刊

章意・節意　句意・語意　嚴密對照

評釋十六夜日記

四六版二四〇頁
定價一圓四十錢
送料六錢

本書は已刊徒然草と評釋の方法を同じうし、最少の時間と最少の努力で國語の素養が十分養はるゝを特色とす。

本書の參考欄は類書に見ざる詳細なる說明をなし引例を附す。

批評摘要欄を設け、或は讀者への希望欄を設け、讀方・解き方・考へ方・味ひ方等親切丁寧に敎ゆ

一般國語學習者、國語受檢者の必讀の書にして類書の白眉たるを疑はず

大阪女子專門學校長　瀧村斐男著

六版

通俗

美學講話

四六版二五〇餘頁
定價　壹圓五拾錢
送料　八錢

第壹章　美の概觀　美と人の根本要求——翫賞と製作——美の根本義——實際世界と美の世界——遊戲と藝術——無關心——恍惚——事實の世界と價値の世界——感情移入——美と感性——美の世界と哲學の世界——美學的感覺と非美學的感覺——色彩と光度

第貳章　美の材料　色と氣分——色の配合——音と情調——美と全人格の要求

第參章　美の形式　秩序の要求と形式——形式の意義——反覆の形式——其の適用と短所——相稱の形式、句の形式——脚色の意義、劇と脚色——統一の法則——象徵主義

第四章　美の表出　表出の意義——非痛の本質——男性的非痛と女性的悲痛——滑稽と笑——詞の滑稽と日本文學——崇高と恐怖——靜寂の崇高と活動の崇高

第五章　藝術に就て　藝術と天然——藝術の係命——藝術と敎代——藝術と眞——藝術と享樂——享樂と人生——各種の特色——純正藝術と應用藝術

再版

シラア著　二高敎授　東北帝大講師　佐久間政一譯

素朴の文學と感傷の文學

定價　二圓
送料　八錢

○本書はシラアの藝術家としての體驗と、カントの哲學を繼承せる哲人としての考察とその結晶である。
○本書はひとりシラアの文學觀であるばかりでなく、彼の人生觀であり、文化史觀である。
○文學を論ずるに當つて、文化の源頭より討究し、文化の赴くべき方向を考へ、其の窺極するところを說いて居る。
○內容、素朴と云ふこと、素朴の詩及詩人、諷刺、哀歌、牧歌、感傷の詩及詩人等、本書の權威が永久的であることは、尙カントの哲學の如きものである。
○譯筆、頗る暢達、明晰にして豐麗である。且詳細なる註解を添ふ。

東京市外大久保百人町九〇　不老閣發行　振替東京壹貳七〇〇

文學博士

速水滉著

現代の心理學

現代の心理學は高等學校專門學校師範學校專攻科の教科書

菊判函入總クロース

上製四百餘頁

定價金三圓

送料拾六錢

上編 心理學の過去及現在

第一章 心理學研究の態度に就て

第二章 附心理學研究の略史

第三章 變態心理學

第四章 動物心理學

第五章 兒童心理學

個人的心理學

第六章 社會心理學及民族心理學

第七章 生物的心理學及實驗的心理學

第八章 心理學の應用附心理學の將來

下編 精神機能の概說

第九章 意識動作及び注意

第十章 習慣本能及び知識

第十一章 感情及び情緒

各高等學校專門學校の教科書或は參考書として採用せらるゝ本書はウイルヘルムヴントが一九一一年其圓熟せる思想を公にせる心理學入門の補譯なり難解なる處には極めて親切なる補註を施せり。卷頭には詳しきヴントの評傳及學說を載せたり。

ヴント氏心理學要領

定價二圓

送料八錢

ヴント評傳及學說　本文　第一章意識及注意　第二章意識の要素

第三章聯合　第四章統覺　第五章精神生活の法則

東京市外大久保百九〇

不老閣發行

振替東京二〇七二一

551
108

終